
魔法少女は本当に

融点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女は本当に

【Nコード】

N7288U

【作者名】

融点

【あらすじ】

魔法少女は、本当に世界を救いたくて戦っているのだろうか。

主人公憂は、あるバイトを紹介された。それは、「魔法少女として敵と戦うこと。」

敵を倒すため、理由も敵の正体もわからず戦っていく魔法少女。

真実に、一体何の意味があるのだろうか。

プロローグ

いたくて戦っているのだろうか。

魔法少女は、本当に世界を救

結局、こんな結果に終わった。

きっと何度もこんな結果を出しつ続けてきたのだろう。

こんなことになるんだったら、どうせこんなことになってしまっ
んだったら。

いっそのこと、何もなかったことにしてしまいたい。

最初からやり直して、世界を作り直して、何も起こらなかったこ
とにして。

普通の、物語で明記されることのないような、普通の人生を送れ
れば、それで――。

そんなこと、できないってわかっているのに。

どうしようもないことに抗い続けるなんて、私には向いてないっ
てはつきりわかる。

私は、ヒーローでもヒロインでもなんでもない、ただの人間なん
だから。

何度繰り返しても、何度やり直しても、私が私じゃなくなっても。

私は私だって、

ちゃんと、わかってる。

第一章「初めまして。魔法少女です」

「バイト？ああ、それならいいのがあるよ。ちよつと適性が必要なんだけどさ。よどみなく言えるね、君なら間違いなく受かる。——ちよつと肉体労働できついかもしれないけど、給料だけは半端なくいい。——もう一度言おうか？君なら絶対大丈夫だ」

——派遣屋。

この街では有名な、ハローワークのように就職からアルバイト、中にはちよつとグレーゾーンな仕事の紹介を扱っている会社。そんな会社が有名だったらすぐ警察に捕まりそんなものだが、なんでも警察の弱みも握っているらしい。——あくまで噂だが。

まあそんなことは使用者には関係なく、親身になって仕事を探してくれる此処の評判は良く、毎日多くのものが仕事を求めて集まってくる。

高校生と思しき少女も、アルバイトを探しに来たらしい。

派遣屋の社員の青年は机の中から資料を取り出し、机の上に乗った。

「仕事場所は特に決まってないんだけど、大体この周辺かな。面接とちよつとした適性試験で合否はその日のうちに——って言うかその場で言われるから、万が一駄目だったり気に入らなかつたらま

たここに。結構面接会場もここから近いから、面接と合わせてもそんなに時間はかからないと思うよ。——ああ、面接は毎日受付中だから、大丈夫。仕事内容はここじゃ言えないんだけど、違法な感じでもグレーゾーンでもないから安心していいよ。——ええっと、何かわからないことはある？」

一気に、一息で少したりとも嚙まずに言っただけの青年は、目の前の少女に問いかけた。

さすがにしゃべりすぎたと反省したらしい。

少女はんーとしばらく考えてから、

「じゃあ、とりあえず一回行ってみます。どこでしたっけ？」

青年は面食らいながら「内容不明だからもつと怪しむかと思った」といい、丁寧に道を教えてやった。

一応地図を受け取り、少女はぺこりと頭を下げた。

「ご親切にありがとうございました」

「いえいえ。仕事ですから」

じゃあ、と少女は派遣屋本社を出て行った。

青年は少女を見送ってから、小さな声で呟いた。

「こっちこそ、本当にすみませんね・・・」

「ああ、はいはい。バイトの方ですね。派遣屋さんから伺ってますよ。十三番の会議室で担当者が待ってますから、そこへ行ってください。ええと、そこです。わかりますか？案内しましょうか？暇ですから」

申し出を丁寧に断ってから、扉の並ぶ一帯に向かった。三番のプレートが付いた扉をコンコン、と二回ノックする。

ちよつとの沈黙の後、

「ああ、はいはい。どーぞー」

間の抜けた返事が返ってきた。

中に入ると、テーブルとイスが適当に並べられていて、窓際の方に二十代くらいの女性と、少年らしき人物が座っていた。それともう一人。顔に「自粛」と書かれた紙を貼り、顔を隠した少女らしき人が壁に寄りかかって立っていた。その少女は、誰かが入ってきたのに気付いて一瞬顔を上げたが、またすぐに下を向いた。（見えていいのかどうかは不明）

テーブルに座っていた少年は二つほどうなずいてから、

「ああ、あなたがバイト希望の、ですか。なるほど」

なるほど？と少女は首を傾げたが、少年は「気にしないでください

い」と。答える気は全くなさそうだ。

女性はにこにこ笑いながら、少女を眺めていた。

女性が何も話そうとしないのを見かねて、少年が話し始めた。

「初めまして。僕はあなたのバイト先になりうる可能性を持った団体の会員です。まあ、社員といっても差し支えはありませんが。こちらは僕の上司で、人事部の部長です」

隣の女性を手で示す。女性はよろしく、と言だけ言った。

少年は話を続ける。

「面接の前に、適性試験を行います。音楽を聴いてもらうだけなのですが、よろしいですか？」

少女はうなずいて、少年の差し出すヘッドホンを装着した。

「では、始めます」

少年がそういった瞬間に、試験は始まった。

少女の耳には、至って普通の音楽が入ってきた。

「・・・？」

三分ほどでそれは終わった。

「もういいですよ。感想をお願いします」

ヘッドホンを外しながら、少女はこう答えた。

「・・・別に、普通の音楽でしたけど」

「あ、そうですか。じゃあ合格です」

すっかり聞き逃してしまうくらい、少年はあっさり言った。

「・・・え？」

「次は面接でしたっけ？まあ、あなたなら性格に問題なさそうだから省略します。あなたがよろしいのであれば、今日からでもあなたを採用しますが、どうでしょう」

あまりの急展開についていけなくなる少女。早い早い、と女性が申告する。

「ああ、失礼しました。ええっと、では業務内容の紹介から。――
――この団体は、魔法少女を扱っています」

「はあ」

突然出てきたファンタジックな言葉。動揺している少女に説明するのも面倒になったのか、立ち上がり

「これは実際に見学していただいた方が早いですね。丁度現在業務が行われているので、行きましょう。部長、よろしいですか」

女性はいーよー。と軽い返事を返した。

「では。こちらです。急いで」

少女の答えも聞かず、少年は会議室を出て行った。

「ちょっと、待ってください——」

あわてて出ていく少女。そのあとを、静かに紙を顔に貼った少女が追う。

まだまだ、始まったばかりだった。

「あの、どこに行くんですか？」

「厳密に言えばもうついています、ここでは危ないのでもう少し離れます。とにかく、ついてきてください——ああ、そういえばまだ名前を聞いていませんでしたね。ここでは本名ではなく主にあだ名を使うのですが、あなたには何かあだ名がありますか？」

少女は、こくんとわずくと「憂^{うい}」とかです」

少年は了承した、とうなずく。そして、自分もまた名前を言っていないことを思い出し。

「申し遅れました。僕はサエギです。もちろんあだ名ですが。で、そちらはフーさん。結構な日数同じ職場にいる僕もこの方の声は聴

いたことはありませんが——まあ、こちらの言鵜ことは通じているようなので、用があつたら普通に話しかけて——かまいませんよね？」

一応確認のために、自肅の紙を貼りつけた少女に振り向く。

フーは当然のようにしゃべらずにひとつづなずいた。

「だそうです。——ああ、そろそろいいですかね」

「ついたんですか？」

そこは、ただの洋服店だった。魔法少女だとか、そんなのが関係しているとは到底思えない。

「ええ。では行きますが、ひとつだけ注意があります」

「はい」

「見学の際は、絶対にフーさんから離れないように」

そういつて、サエギは洋服店の自動ドアを抜け、店の中に入っていた。

憂も、フーに押されるようにしてそれに続いた。

その中には、誰もいなかった。

「——え？」

人気がないとかそういうわけではない。なぜなら、店員すら一人もいないから。

それに、さつき外からガラス越しに見たときには、そこそこの賑わいを見せていたはずなのに——。

困惑する憂に、さらに追い打ちをかけるように爆発が襲いかかった。

「——っ！？」

思わず顔を手で隠すが、その体には爆風すら届かなかった。

「……？」

「大丈夫ですよ。フーさんがバリアを張ってくれたみたいですから。この中は安全です」

見てもこう、アニメのように色がついてたりするわけではないので視認することはできなかったが、確かに自分があるエリアを爆風が避けるようになっていた。

「あの、聞いていいですか？」

「ええ。このことですよね。ここは偽空間、というやつでしてね。魔法少女が戦うために被害が生じては意味がないということで、本物そっくりの空間を違う次元の中に作り出し、そこで戦う。——

—というシステムなんです。偽空間の存在を知っていて認知できれば、その空間の中のどの扉からでも入ることが可能です。もちろん偽空間ですから、人は一人もいません。いるのは——魔法少女だけです」

外を見ると、見えたのは——怪物。

漆黒の、巨大化した狼のような生物が、落ち着きなく動きまわりながら口から火を吐き続ける。

その周りに、まるでハエのように飛び回っているのは——
間違いない。

あれが、魔法少女だ。

ファンタジックな戦闘にはとても向いているとは言えない格好。それに反比例するかのように実用的な武器を手に、複数人で自分の体の何十倍もある生物に襲い掛かっていた。

「もっと近づいてみましょうか。ここではよくみえないでしょう。大丈夫。フーさんが守ってくれますから」

「えっ別にいいですよ。ここで」

サエギは憂のこと無視して、洋服店から出る。

フーもそれに続こうとしていたので、仕方なくついていく。

「うわぁ・・・」

火が飛び交い、光が怪物を包み込む。刀を持った一人の魔法少女が前足を切り刻み、バズーカを構えた魔法少女が目命中させる。

サイズの違いをもろともせず、圧倒的な差で魔法少女が押している。

その中の一人が気が付いて、こちらに手を振った。

「サーエギ——」。その子新入り——？」

自分の背丈よりも大きな大剣をぶんぶん振り回しながら、気楽に話しかけた。

「ええ。そうですよ」

その返事を聞いて、そいつは大剣を頭上に掲げ、光をそれに集中させた。

「じゃあ、いいとこ見せちゃおっかなあ。っと！」

青白い光に包まれた大剣を、一気に振り下ろす。

「いつけえ！シャイニング・バースト！」

光が的確に首を切り落とし、狼はその場に崩れ落ちた。

そして、狼は光の粒になって空へ舞い上がり、どこかへ消えていった。

「ああ、終わりましたね。ちなみに、戦闘が終わると偽空間は自動的に消滅します」

空が、まるでガラスが割れたかのように碎け散り、同時に壊れていた街並みも元に戻った。

気が付くと、街はいつも通り普通に戻っていた。

目の前には、さっきまで戦っていた魔法少女が一般的な制服を着て立っていた。もちろん、武器なんて持っていない。ただの、普通の高校生だった。

そして、一番前にいた少女が代表していった。

「初めまして。魔法少女です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7288u/>

魔法少女は本当に

2011年10月9日04時54分発行